

---

# 少年の異世界戦記 ~ T O S 編 ~

クロイツヴァルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少年の異世界戦記 ～TOS編～

### 【Nコード】

N5082Z

### 【作者名】

クロイツヴァルト

### 【あらすじ】

戒翔が渡った世界は二つの世界が魔力を搾取しあう世界であった。そこには再生の神子と呼ばれる存在とそれを追うデザイナーと呼ばれる存在がいた。戒翔は渡った世界で世界にどのような影響をもたらすのか……。

これは戒翔が神になる修行の一環で渡って行くお話です。

## s t a g e 0

『此処は…何処だ？』

戒翔が気付いた場所は一面が森しか見えない場所だった

『地球で…は無さそうだな…。8とアルは……人格が破損して修復中…だな……ん？』

戒翔は自身の現状という場所を検索していると草むらの奥からガサガサっという音と一緒に一匹の兎と思われる獣が現れる

『うさぎ？いや、一角獣？俺はまた世界を跳んだのか？つと！危ないな…<sup>トレスオン</sup>同調開始！』

そうやって戒翔は魔術回路に魔力を通し、両の手に白と黒の一对の夫婦剣、干将白耶を投影した

『行くぞ、飛連斬！』

戒翔は飛びかかってきた兎擬きにカウンターの要領で干将で斬りあげ、白耶で斬りおとすと、それで決まったのか兎擬きは粒子の様なモノに還る

『アレは…マナか？って事はテイルズの世界か？レンズが落ちない所をみればDではない様だな』

戒翔が1人でそう考えを纏めていると先ほどの獣が出て来た奥から

1人の…自分よりも1つか2つ下と見れる少女が戒翔の前まで走って来て転びそうになった所を戒翔は抱き止めて、受け止めた

「大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます!？」

少女が戒翔にお礼を述べていた、そこへ少女が出て来た奥からは身の丈が2メートルを超える熊の様な獣が先ほどの兎擬きが5匹を引き連れた形で現れる

「あッ!？」

『アレに追われてたのか?』

「う、うん。ロイドと一緒に先生に上げる花を探してたんだけど途中ではぐれちゃって」

『それで、迷って歩いていたらあのモンスター達に遭遇した…って事か』

「う、うん」

『……そこから動くなよ?直ぐに片付けてくるから』

「えッ!？」

『喰らえ!魔神拳!』

少女が驚きの声を上げる…が戒翔はそれを無視して近くにいる一匹

の兎擬きに音速で拳を振り抜き、衝撃波を飛ばし、一撃でマナに還す

「す、凄ーい！ー！」

少女が吃驚した声を上げる中、戒翔は次々とその拳で、脚でモンスターをマナに還す。そして

『コイツで…ラストオツ！獅子戦哮おツ！ー！』

戒翔は両手に溜めた気を獅子の形にして解放して、最後に残っていた熊のモンスターをマナに還すと辺りを見回して他にいない事を確認すると構えを解く

『だいじょ、コレットに近付くな！』ん？』

戒翔が少女に近付こうとすると戒翔の横を横切る様にして鷲色の髪を立たせた少年が走る。そして、そのまま二本の木刀を戒翔に向け、少女を後ろに庇いながら対峙する

「このやろつ、これ以上近付くな！コレット、大丈夫か？」

「ロ、ロイド！？ち、違つよー！」

「先手必勝！てりゃー！！」

『ちッ！』

コレットと呼ばれた少女がロイドと言った少年は戒翔に襲い掛かって来た

「虎牙破斬！」

少年は戒翔に向けて木刀の一つを振り下ろした

『甘い！』

「なッ！？」

『少し、大人しく…しろ！烈破掌！』

「ぐあッ！」

「ロイド！？」

戒翔は左腕でそれをいなし、右の掌を少年の腹部に当てると掌から気を爆発させて少年を吹き飛ばした

「くッ、コレット…逃げろ！」

少年、ロイドは戦意を戒翔を睨み付けながら少女、コレットに叫ぶ

『失礼だが少年、君は少しは冷静になつて欲しい。』

「なんだと！！」

「あ、あのねロイド？違うの！この人はわたしを魔物から助けてくれたの！」

「……………えっ？」

それから暫くして

「ほんつとにゴメン!!」

『いや、誤解が解けたのなら構わない。寧ろ此方が謝らなければならぬだろ？見知らぬ人間には当然の反応だし、妥当な判断だ。』

そこには少年、ロイドが戒翔に両手を合わせて謝罪をしていた。そして、謝られている本人は苦笑をしていた。

「あの、助けてくれてありがとうございます！わたしの名前コレット・ブルーネル、マナの血族で神子です、よろしくね」

「俺はロイド、ロイド・アーヴィング」

『（素直に言ったら変だな…）俺はカイト・クロイツだ』

「カイト…か、カイトはこんな所で何をしてんだ？」

『恥ずかしい話だが、旅の途中で立ち寄ったこの森で迷子になって困っていた所だ。』

「それならわたし達の村に来ませんか？」

『はっ。』

「お！コレット、それ良いな！良し、決まったなら善は急げだ！」

「おー」

『は？ちよつ、待て「早く行こ？」（しょうがないな）…解った、案内を頼む。コレット』

「うん！任せて」

そして、ロイドとコレットの2人に道案内をしてもらい信託の村イセリアに着くとセミロングの銀の髪を持ち、少しキツめの目をした女性が此方に近づいて来るのが見えた

「2人ともどこに行っていたの！」

「げっ、先生!？」

「リフィル先生だ〜」

銀髪の女性、リフィルと呼ばれた女性は近くに来た途端に凄い剣幕で2人を怒鳴る。その際にロイドはしまったと、コレットはほんわかした感じの反応で声を出していた。

「あら？そちらの男性は？」

「わたしが魔物に襲われた時に助けてくれたんだよ？」

「魔物に？まさか！あなた達は外に出ていたの!？」



「「うん、ごめんなさい!」」

『まあ、2人は悪気があつて出た訳ではない様だしそこら辺にしてはどうです? 貴女に感謝を込めて何かを探していた様だからな』

「はい、先生いつも勉強を教えてくれてありがとうございます」

「花? いい香りね」

「良かったな、コレット!」

「うん」

「だからと言って外に行つた事は許しませんよ? 罰として、あなた達には反省文を書いてもらいます!」

「そりゃないぜ、先生」

「ロイド、頑張ろ?」

『それじゃ、俺は宿屋をさが「此処には宿屋はないわよ?」……なに?』

「ここは観光地とは違つから宿屋はないわ」

『そうなる打野宿「あ、あの!」……ん?』

「わたしのお家に来ませんか? 助けて下さつたお礼もしたいですし」

「そうね、ならコレットはその……ごめんなさい、名前を聞いてなかったわね。わたしの名前はリフィル・セイジよ。改めて2人を助けてくれた事を感謝するわ。」

『いや、たまたまに過ぎない事だし、当然の事をしたただけだ。俺の名前はカイト・クロイツだ。』

「コレットはそのままその人を案内してあげなさい。ロイドはわたしと一緒に来なさい」

「ええー！そりゃないぜ！」

「ロイド、ごめんね？」

『済まんな、こればかりは俺には……な？』

「さっ、行くわよ？」

「だっ、イタタタッ！？先生、痛いって！」

自己紹介を済ませて、リフィルはロイドの耳を摘んで校舎と思われる建物の方へと歩いて行く。ロイドの悲鳴を響かせながら

「行こっか」

『……そうだな。（ロイドの奴、大丈夫か？）』

連れて行かれたロイドを見ながら、カイトはコレットに案内され、村の中でそれなりに大きい二階建ての家の前に着いた。

『此処が…』

「うん、わたしの家だよ」

そして、コレットが家のドアを開ける

「コレット!?!どこに行っていたんだい?心配したんだよ?」

「お父様、心配を掛けてごめんなさい。」

コレットがそう呼ぶのはコレットと同じ髪の色で、短く切り揃え、真面目な印象を与える男性だった。

「コレットが無事でなによりだよ。…それで其方の方は?」

「この人はカイトさんって言うんだよ」

『クロイツ・カイト、旅をしています。』

「わたしの名は、フランク・ブルーネル、コレットの父親さ。」

「お父様お願いがあるんだけど」

「なんだい?」

「カイトさんをお家に泊めてあげたいんだけど」

「それは…良いけど、どうしてだい？」

「それは…『俺が説明します。』…カイトさん？」

カイトを何故、泊めたいのかを父親に聞かれたコレットが気まずい顔をしているとカイトが少し前に出て告げるとコレットが「何故？」と不思議な顔をして、カイトを見上げていた。

『よろしいですか？』

「良いとも、説明をお願いするよ。」

そして、カイトがコレットに会った時の一部始終の話をした。

「…そう、ですか。そう言う訳でしたら歓迎いたしますよ？コレットを守ってくれた事、心から感謝します。」

そしてその後、もう1人、この家の住人であるファイドラ…コレットの祖母にして先代神子の妹であり、今のシルヴァラントにおける祭司達の育成係の様な事を行っている。そのファイドラに自己紹介をして、夕食を食べた後、カイトがコレットに案内されて入ったのは一つの空き部屋であった。

「ここがカイトさんの寝る部屋だよ。」

『助かったよ、コレットに会わなかったら俺は野宿確定だったからね？』

「わたしこそ、助けてくれて『ちよつと待った』…え？」

『その喋りはどうにかならないのか？そんな畏まった喋り方をされるとむず痒くて堪らないんだ。』

「なら、カイトさ…カイトもだよ？」

『そうか？』

「うん」

『わかった。それじゃ、おやすみ。』

「おやすみ」

そう言ったコレットが部屋を出た後、カイトは部屋の窓から外を見る。

『「この世界に渡った理由は解らない…」が、シンフォニアと言う事が解った…なら、やる事は決まったな…。』

そう言ったカイトはベッドに入ると直ぐに意識を落とした。

## stage0 (後書き)

ご感想とご意見、アドバイスをお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5082z/>

---

少年の異世界戦記 ~ T O S 編 ~

2011年12月17日04時58分発行